



日本ワクチン学会 ニュースレター

vol.8

目 次

1. 第7回日本ワクチン学会学術集会報告
 - 1) 第7回日本ワクチン学会学術集会を主催して 浅野喜造 ……2
 - 2) シンポジウムまとめ
 - シンポジウム I 「近未来のワクチン」 谷口孝喜 ……2
 - シンポジウム II 「Common な感染症の現状と予防接種」
庵原俊昭 ……3
 - 3) 緊急シンポジウム「SARS の現状と今後の展開」
岡部信彦 ……4
2. ワクチン関連トピックス
 - 1) トピックス I 『風疹ワクチンをうけましょう。』 ……5
 - 2) トピックス II 『2004/05シーズン用のインフルエンザワクチン株決定』
……………6
3. 第8回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ (第2報)
第8回学会学術集会会長 富樫武弘 ……6

§ 第7回日本ワクチン学会学術集会を主催して

藤田保健衛生大学小児科 浅野喜造

第7回日本ワクチン学会学術集会（平成15年10月18日—19日、名古屋）に際しましては、格別のご指導とご協力を賜り、誠に有難うございました。秋空の天候にも恵まれ、参加者数400名を超える大盛會裡に学会を無事終了することができました。この場をお借りして、心より感謝と御礼を申し上げます。

本学術集会では、一般演題37題以外に、会長講演1題、シンポジウム2題、教育講演2題を当初準備いたしましたが、新興感染症として新たに発生したSARSに関する情報収集の必要性が日毎に高まり、またプログラム進行上の時間的余裕も若干生じたことから急遽、緊急シンポジウムとしてSARSを取り上げ、その現状と今後の展開についてご講演をいただきました。本シンポジウムでは、情報収集、ワク

チン開発、基礎的研究に直接携わる現場研究者の「生の声」を直に聞くことができ、熱心に耳を傾ける聴衆者の表情が大変印象的でした。幸いにして、当初懸念されたインフルエンザ流行時期におけるSARS同時発生もとりわけ問題視されずに新春を迎えることができ、ほっと一息ついた研究者も多いことでしょう。

なお、今回より初の試みとして、学会員全員にプログラム・抄録集を事前に送付したこと、またパソコン使用を導入したことからの新たな問題、不手際が生じ、演者の先生方には大変なご心配とご迷惑をお掛けしたことをお詫びするとともに、北海道における次期第8回日本ワクチン学会学術集会の盛會を心よりお祈り申し上げます。

§ シンポジウム I 「近未来のワクチン」のまとめ

座長 谷口孝喜（藤田保健衛生大学）
倉田 毅（国立感染症研究所）

「ワクチン開発と免疫学」 吉開泰信（九州大学）
「単純ヘルペスウイルス（HSV）の臨床応用」 西山幸廣（名古屋大学）
「経口感染ウイルスのウイルス様中空粒子（VLP）を利用した経口ワクチンの開発」 保富康宏（三重大学）

感染症の制圧は、いかにすぐれたワクチンが開発されているかにかかっているとんでも過言ではない。現在、感染症の基礎研究にたずさわっているほとんどの研究者は、ワクチン開発に多かれ少なかれ関連した研究テーマを有しているのではないだろうか。少なくとも、表現は適切ではないが、大義名分としても、ワクチン開発研究に関連した研究となれば、研究の意義が自他ともに納得できるとさえ言える。ワクチンの開発研究は、まさに社会的要請に対応した研究ということがその底流にある。そして、臨床に役立つ基礎研究、臨床と基礎が合体した研究は理想的な研究の形である。

さて、現行のワクチンのほとんどはいわゆる古典的な方法でワクチンが開発されてきた。免疫学的な

理論に基づき、そして、分子生物学的手法を駆使して開発されたワクチンは少ない。その意味で、今回の3方の先生方の講演は、まさに近未来のワクチン開発のための新たな動向を示したものと言える。吉開先生は、メモリー T 細胞の産生維持機構の分子基盤についての詳細な研究をもとに、IL-2サイトカインファミリーの IL-15 をワクチンアジュバントとして用いた研究成果を紹介された。西山先生は、実験室株から得られた単純ヘルペスウイルスの変異株 HF10 が強い抗腫瘍活性を有することを発見し、それをを用いて、皮膚転移巣を有する再発性乳癌の治療に応用し、すでに臨床試験を行い、すばらしい成績を上げておられる研究内容の講演をされた。保富先生は、バキュロウイルス発現系で調製した E 型肝炎

ウイルス由来ウイルス様中空粒子 (Virus-like particle: VLP) を用いて、経口投与で粘膜免疫を誘導するワクチンの開発について述べられた。異種のウイルス抗原エピトープを挿入したキメラ VLP の作製、さらに VLP 内に DNA ワクチンを封入して、DNA ワクチン投与ベクターとしての可能性を報告された。

いずれも、基礎と臨床が合体した研究ないしは基

礎研究の臨床への応用をお示しいただいた。タイトルの通り、近い将来、こうした新世代のワクチン開発が実現するであろうとの印象を多くの方が持たれたものと思う。

谷口孝喜 (藤田保健衛生大学)

注意：座長・講演者の所属は第7回学術集会抄録集へ掲載された時のもの。

§ シンポジウムII「Common な感染症の現状と予防接種」のまとめ

座長 庵原俊昭 (国立療養所三重病院)

加藤達夫 (聖マリアンナ医科大学)

「予防接種の経済効果」 大日康史 (大阪大学社会経済研究所)

「麻疹根絶に向けて一わが国の現状と課題」 尾崎隆男 (昭和病院)

「インフルエンザワクチンの今後」 森島恒雄 (名古屋大学)

予防接種の評価には、接種後の抗体反応や細胞性免疫をみる免疫学的評価方法、流行時にワクチンを受けた集団での発症予防効果をみる疫学的評価方法、予防接種が導入された時の費用対効果をみる経済学的評価方法などがある。本邦では予防接種の免疫学的評価は広く行われているが、予防接種の疫学的評価や経済学的評価は十分には行われていない。特に予防接種の経済学的評価に関しては、多くのワクチン研究者や臨床家にとって馴染みが少ない分野である。

今回、先ず国立感染症研究所感染症情報センターの大日先生に、「予防接種の経済効果」という演題で、予防接種の医療経済効果の考え方、分析方法について実例を用いて紹介頂いた。ワクチン予防可能疾患が流行し重篤な合併症を伴うと、その疾患を予防するワクチンの定期接種化や2回接種化を望む声がかかる。しかし、予防接種の定期接種化などの政策決定を行うにあたっては、社会全体からみた各予防接種の費用対効果分析を行うなどの政策的根拠を明らかにする必要性が示された。

次いで愛知県厚生連昭和病院小児科の尾崎先生に、「麻疹根絶に向けて一わが国の現状と課題」という演題で、愛知県で行った小児麻疹に関する調査成績を中心に講演頂いた。愛知県の調査では小児麻疹の94%がワクチン未接種であり、発症年齢では9～15ヶ月児に罹患が集中していた。現在の先進国の医療レベルをもってしても、麻疹の死亡率は10万人

あたり100～200と高頻度であり、高い接種率で社会的に麻疹流行をコントロールする必要性が示された。

最後に岡山大学小児科の森島先生に、「インフルエンザワクチンの今後」という演題で、インフルエンザワクチンが小児におけるインフルエンザ脳症を予防できるかという点を中心に講演頂いた。現在までのところ、インフルエンザワクチンがインフルエンザ脳症の発症を予防するという直接のエビデンスはない。しかし、現行のインフルエンザワクチン接種により小児のインフルエンザ発症が予防できるならば、インフルエンザ脳症の発症も減らすことが予測できるとまとめられた。いずれにしても、接種量や接種方法を含め、現行のインフルエンザワクチンよりも効果的な小児に対するインフルエンザワクチンの開発の必要性が示された。

今回のシンポジウムを通して、麻疹ワクチンの2回接種化やインフルエンザワクチンの小児への定期接種化など、各種予防接種の政策決定や政策変更を行うためには、根拠となる免疫学的エビデンス、疫学的エビデンス、経済学的エビデンスの3種のエビデンスを明らかにすることの重要性が示された。

(文責：独立行政法人国立病院機構三重病院 庵原俊昭)

注意：座長・講演者の所属は第7回学術集会抄録集へ掲載された時のもの。